



Title	英領ケープ植民地におけるアサイラムの史的展開
Author(s)	落合, 雄彦
Citation	スワヒリ&アフリカ研究. 2021, 32, p. 42-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81406
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英領ケープ植民地におけるアサイラムの史的展開

落合 雄彦

0. はじめに

かつて「アサイラム」(asylum) としばしば呼ばれていた、精神病者を収容するための専用施設が、大英帝国の海外領土のなかで最初に開設されたのは、イギリス東インド会社の統治下にあった、17 世紀から 18 世紀にかけてのインドである。インドのボンベイ(現ムンバイ)には、当時まだ必ずしもアサイラムと明確に呼称されていたわけではないが、ヨーロッパ系白人の精神病者を収容するための、いわゆる「狂人院」(madhouse) に相当するような施設が、少なくとも 1670 年代までには設けられていたという (Smith 2014: 14)。その後、1740 年代になると、30 名程の精神疾患患者を収容できる病院がやはりボンベイに開設され、さらに 1787 年にはカルカッタ(コルカタ)にも精神病者専用の施設が設けられた。これらはみな民間の施設であったが、1795 年になると、インド初の公立アサイラムがモンギール(ムンゲール)に開設され、主に精神疾患を患う白人兵士を収容するようになった (Basu 2016; Nizamie and Goyal 2010)。

これに対して、同じように大英帝国に属する植民地ではあっても英領アフリカの場合、イギリスによる植民地化の時期がインドよりもかなり遅かったこともあって、アサイラムが開設されるようになるのは 19 世紀半ば以降のことになる。そして、そうした英領アフリカの諸植民地のなかでも最古のアサイラムのひとつが設けられたのが、今日の南アフリカ共和国の史的起源となったケープ植民地 (Cape Colony) にほかならない。ケープ植民地では、後述するとおり、1846 年にケープタウン (Cape Town) という町の沖合に浮かぶロベン島 (Robben Island) に最初のアサイラムが開設された。そして、同植民地が周辺の他の英領植民地とともに南アフリカ連邦 (Union of South Africa) を形成して本国イギリスから独立した 1910 年までの約 65 年間に、ケープ植民地内にはロベン島の施設を含めて 5 つの公立アサイラムが設けられた。

本稿の目的は、英領アフリカ最古のアサイラムのひとつが設けられた南アフリカ・ケープ植民地に注目し、同植民地における 5 つの公立アサイラムの史的展開を概観することにある。

当時の英領ケープ植民地は、先住民であるコイサン人、コーサ人などの黒人、オランダ系やイギリス系の白人、マレー系などの混血であるケープ・カラードなどが混在する多人種的な社会であった。そして、そうしたケープ植民地社会の多様な人種性を反映する形で5つの公立アサイラムもまた成立し、展開していった。より具体的にいえば、英領ケープ植民地の5つのアサイラムは、施設内あるいは施設間での人種隔離的な環境や仕組みを漸進的に整備するという形で展開されたのである。

1. ロベン島総合施療院

ケープ植民地は、もともと17世紀半ばにオランダ東インド会社によって東方貿易のための補給基地として建設され、その後1814年にイギリスがオランダから最終的に獲得した植民地である。

英領化後のケープ植民地では1818年、サミュエル・ベイリー (Samuel Silverthorne Bailey) という医師によって、のちにオールド・サマーセット病院 (Old Somerset Hospital) と呼称されることになる民間医療施設がケープタウンに開設された。同病院はその後、財務状態が悪化して1821年に公立化されたが、このオールド・サマーセット病院こそが、英領ケープ植民地において、監獄や刑務所以外で精神病者を正式に収容する初めての施設となった (Burrows 1958: 109)。

しかし、オールド・サマーセット病院は、当初から一般病院と精神病患者用アサイラムの両方の機能を果たす機関として開設されたものの、施設が手狭なこともあって、精神病患者と他の入院患者の病棟を明確に区分することができず、このため両者間での暴力沙汰や不適切な性的関係といったトラブルが後を絶たなかった (Swartz 2015: 31)。

そこで、ケープ植民地政府は1846年、各地の刑務所やオールド・サマーセット病院にいる精神病患者を隔離・収容するために、ケープタウンの沖合に位置するロベン島に「総合施療院」 (general infirmary) を開設した。同院には、精神病患者だけではなくハンセン病や慢性疾患の患者も収容されたが、公立施設であるこのロベン島総合施療院 (Robben Island General Infirmary) の設立は、ケープ植民地における「アサイラムの時代」の到来を告げる出来事であったといえる。

イギリス本国、特にイングランドでは19世紀後半、「州立アサイラム」 (county asylum) が各地に次々と建設されたが、ロベン島総合施療院の開設を皮切りにケープ植民地でもほぼ同時期、複数の精神病患者用アサイラムが開設されていった。他の多くの英領アフ

リカ諸植民地では、たとえば西アフリカのシエラレオネ植民地 (Colony of Sierra Leone) のように公立アサイラムは通常 1 カ所程度しか設けられなかった。これに対して、白人入植が進んだ英領ケープ植民地では、人種隔離を進める必要もあって、イギリス本国と同様に複数のアサイラムが開設され、まさに「公立アサイラムのネットワーク」とも呼ぶべき状況が形成された (Swartz 1999) (図 1 参照)。

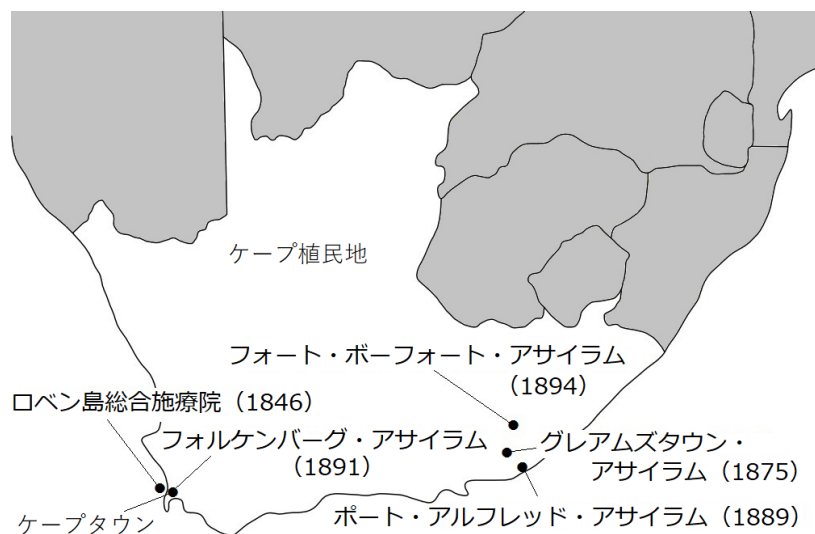


図 1 ケープ植民地の 5 つの公立アサイラム

注) 括弧内は開設年を示す。
出所) 筆者作成。

ロベン島総合施療院が開設されると、ケープ植民地各地の監獄、病院、セツルメントなどにいた慢性病、ハンセン病、そして精神病患者が次々と同島に送り込まれてきた。オールド・サマーセット病院に収容されていた精神病患者のなかには、自分が本土を離れてロベン島へと移送されてしまうことに強く抵抗する者もみられたが (Deacon 1996a: 58)、結局、同病院にいた 51 名が精神病患者の第一陣としてロベン島総合施療院へと転院させられている (Swartz 2015: 33)。そして 1847 年 5 月までに、慢性疾患患者 72 名、ハンセン病患者 54 名、精神病患者 68 名がロベン島の施療院に収容された (Deacon 1996a: 59)。

慢性疾患患者、ハンセン病患者、精神病患者という、ロベン島総合施療院の 3 種類の被収

容者グループは、それぞれにかなり異なった社会的特徴を有していた。たとえば慢性疾患患者は、そのほとんどが男性であり、少なくとも 1860 年代までは白人がその約 3 分の 2 を占めていた。これに対して、ハンセン病と精神病の被収容者には男女差はあまりみられず、また、その大半がケープ・カラードを含む広義の黒人によって占められていた (Deacon 1996a: 59)。特に精神病患者の場合、開設からの 15 年間にロベン島に収容された者の約 6 割が黒人 (カラードを含む) であり、その約半数は触法精神病患者であった (Deacon 2003: 22)。つまり、当初のロベン島アサイラムは、罪を犯したり、自傷他害の恐れがあったりするようなカラードなどの非白人の精神病患者を多く収容する隔離施設だったのである。そこでは、非白人の触法精神病患者が多いこともあって、「治療」ではなく「収容」の側面が重視され、治療的行為は実質的にはほとんど施されていなかった。

ところが、1860 年代になると、ケープ植民地内にも次第にモラル・マネジメントの考え方が普及するようになり、そうした影響を受けてロベン島総合施療院でも精神病患者をめぐる施設や待遇の改善が図られるようになった。そして、モラル・マネジメントの方針にもとづくロベン島アサイラムの一連の改革を主導したのが、ウィリアム・エドモンズ (William Edmunds) というイギリス人医師であった。

1862 年にロベン島総合施療院の院長に就任したエドモンズは、精神病患者の施設や処遇の改善に努めた。具体的には、足枷や鎖などの身体拘束具の使用を非人道的な処遇であるとして原則禁止したり、被収容者の食事内容を改善したり、精神病患者のためにダンスやスポーツといった娯楽を積極的に導入したりした。また、精神病患者と接する職員の間にもモラル・マネジメントを浸透させるための研修を繰り返し実施した。さらに、1867 年には「ギャラリー」(Gallery) と呼ばれる、私費での入所を希望する白人女性精神病患者向けの特別施設がエドモンズ主導のもとで開設されている。

そして、こうした一連の改革の結果、1860 年代以降、ロベン島アサイラムには、それまでの非白人の触法精神病患者だけではなく、より多くの白人中産階級の人びとが私費患者として任意入院してくるようになった。1872 年以前のロベン島アサイラムの私費入院患者数は全体の 5%未満にすぎなかったが、1872 年から 1890 年にかけての時期になると、同アサイラムに初めて入院する者の約 25%は私費患者によって占められるようになった。そして、そうした私費患者の大半は、相対的に裕福な白人によって占められていた (Deacon 1996a: 66-67)。

しかし、後述するとおり、1870 年代以降、ケープ植民地の本土にも白人の精神病患者を収容可能なアサイラムが開設され、特に 1890 年代に入って、ケープタウンの郊外に白人専用アサイラムが創設されると、ロベン島に私費で入院する白人精神病患者の数は急速に減少していった。そして、ロベン島アサイラムの被収容者数は、20 世紀初頭には再びその大多数がカラードなどの非白人の精神病患者によって占められるようになる (Deacon 2003: 22)。

前述のとおり、ケープ植民地は 1910 年、南アフリカ連邦の一部としてイギリスからの事実上の独立を達成したが、その後、医師や看護師として白人のみを高待遇で雇用してきたこと、食料を含む生活物資のほとんどを本土から運搬しなければならなかったこと、20 世紀に入ると、少なくともハンセン病患者については強制隔離の必要性がないことが国際的に広く認知されるようになったことなどもあって、ロベン島総合施療院は、維持コストが高額であるにもかかわらず、その存在意義が希薄な施設とみなされるようになる。そして、1921 年にはまず精神病患者用アサイラムが廃止され、次いで 1931 年にはハンセン病病院を含む総合施療院全体が閉鎖されるにいたった (Deacon 1996b: 294)。

2. グレアムズタウン・アサイラム

ケープタウンから東に約 750 キロメートル離れたグレアムズタウン (Grahamstown) という町に精神病患者用アサイラムが開設されたのは、ロベン島総合施療院の開院から 30 年後の 1875 年のことである。グレアムズタウンにある軍事要塞フォート・イングラランド (Fort England) がアサイラムへと転用されることになり、ロバート・ハラ (Robert Hullah) という白人医師がその初代院長に就任した。ハラの報告書によれば、1876 年 1 月 1 日時点でのグレアムズタウン・アサイラム (Grahamstown Lunatic Asylum) の被収容者数は、男性精神病患者 9 名、女性精神病患者 11 名、男性慢性疾患患者 6 名の計 26 名であったという (cited in Minde 1974: 2230–2231)。

その後、ハラが死去したことを受けて 1890 年にグレアムズタウン・アサイラムの 2 代目院長に就任したのが、スコットランド人医師のトーマス・ダンカン・グリーンリース (Thomas Duncan Greenlees) である。そして、グリーンリースは、ケープ植民地政府に働きかけて 1894 年、アサイラムとは別に知的障害児院 (Institute for Imbecile Children) をグレアムズタウンに開設し、その施設長を兼務するとともに、精神障害や知的障害に

対する社会的な差別や偏見を緩和することに尽力した。具体的には、グリーンリースは、アサイラムを地域住民に定期的に開放したり、アサイラムに収容された精神病患者を地域のイベントへと逆に連れ出したりすることで、周辺住民と精神病患者の交流を促し、精神障害をめぐるスティグマを取り除こうとした (du Plessis 2015: 25–27)。

グレアムズタウン・アサイラムは当初、人種や社会階層にかかわらず精神病患者を受け入れていたが、グリーンリースは、ロベン島アサイラムと同様、アサイラムの財政基盤強化のために、特に白人の私費入院患者をより多く獲得しようとする。そしてそのために、白人の私費患者に対してはアサイラム周辺の散策や海辺への遠足といった特別なレクリエーションを提供したり、1904 年にはロベン島のギャラリーに相当するような「ダグラスハウス」(Douglass House) と呼ばれる白人女性私費入院患者専用の特別施設を開設したりした。これに対して、グレアムズタウン・アサイラムに公費で強制入院をさせられていた非白人患者には、そうした特別なレクリエーションは提供されず、非白人入所者の多くは「作業療法」と称して農作業や清掃作業に従事させられた (du Plessis 2015: 31–34)。

その後、グレアムズタウン・アサイラムは一旦 1908 年に白人専用施設となったが、1952 年には非白人精神病患者専用の病棟を設け、その受入れを再開している (Sukeri et al. 2014: 36)。同アサイラムは、のちにフォート・イングラント精神科病院 (Fort England Psychiatric Hospital) へと改称され、現在は薬物依存症者のリハビリテーション施設を兼ねた地域拠点的な精神科専門病院として機能している。

3. ポート・アルフレッド・アサイラム

ケープ植民地東部で増加する精神病患者をグレアムズタウン・アサイラムのみでは十分に収容できないと判断した植民地政府は、1889 年、カウィ川河口の町ポート・アルフレッド (Port Alfred) に新たにアサイラムを開設した。このポート・アルフレッド・アサイラム (Port Alfred Lunatic Asylum) の 1889 年開院当時の被収容者数は、男性患者 27 名、女性患者 25 名の計 52 名であった。そして、その初代院長にはウォルター・アザーストーン (Walter H. Atherstone) というケープ植民地東部出身の医師が就任した。アザーストーンは 1920 年まで同アサイラムの院長を務めた (Minde 1974: 2231–2232)。

ポート・アルフレッド・アサイラムは、もともと受刑者収容所として使用されていた建物を改築して開設されたアサイラムであり、精神病患者に対して看護や治療を施すの

にはまったく不向きな施設であった。また、同アサイラムは深刻な水不足にしばしば見舞われた。しかし、ケープ植民地政府は同アサイラムの施設環境整備には予算をほとんど割こうとはしなかった。この結果、ポート・アルフレッド・アサイラムは、他のアサイラムに一旦収容されながらも寛解が見込めず、かつ、親族による面会もほぼ期待できないような、事実上見捨てられ、行き場を失った精神病者を受け入れる収容施設と化していく。南アフリカ連邦成立後の 1910 年代には、同アサイラムは、その劣悪な施設環境のゆえに閉鎖を一時勧告されたこともあったが、その後も存続し、少なくとも 1969 年には男性 261 名、女性 269 名の計 530 名の入所者を擁していたという (Minde 1974; Swartz 1999)。

4. フォルケンバーグ・アサイラム

1891 年、ケープ植民地政府は、フォルケンバーグ・アサイラム (Valkenberg Mental Asylum) と呼ばれる白人専用アサイラムをケープタウン郊外に開設した。そして、同アサイラムの初代院長に就任したのが、ジョン・ウィリアム・ドッズ (John William Dodds) というスコットランド出身の医師であった。

ケープ植民地政府は、かねてよりロベン島総合施療院、グレアムズタウン・アサイラム、そして、細々とではあるがその後も精神病者の受入れを継続していたオールド・サマーセット病院などにおける精神病者の処遇を改善するとともに、増加する特に白人精神病者を収容するための専用アサイラムを新たに開設することを検討していた。そして、そうしたアサイラムの管理運営を中核とするケープ植民地の精神保健行政全般の改革のために 1889 年に新設されたのが「アサイラム視察官」(Visitor to All Asylums) という官職であり、それはのちに「アサイラム監査官」(Inspector of Asylums) へと改称された。ドッズは当時、スコットランドのアサイラムで副院長を務めていたが、この新設の官職に就くためにケープ植民地に赴任してきた (Marks 1999: 272)。

こうして 1889 年にケープ植民地政府のアサイラム監査官に就任したドッズは、1891 年にフォルケンバーグ・アサイラムが開設されると、その院長を兼務するようになる。そして、アサイラム監査官としてケープ植民地各地の精神病者用施設を年 2 回定期的に視察する一方、フォルケンバーグ・アサイラムの院長として同アサイラムの入所者への診察や治療を担当した。

ドッズは、ケープ植民地初の白人専用アサイラムであるフォルケンバーグを、それま

での同植民地のアサイラムとはまったく異なる施設にしようとした。ロベン島総合療院やグレアムズタウン・アサイラムが触法者や暴力的な精神病者の「収容」を主眼とし、そのために軍事施設や収容所を再利用する形で開設・運営されてきたのに対して、フォルケンバーグ・アサイラムは「治療」の側面をより重視し、イギリス本国のアサイラムに準じた精神病患者専用施設を建設することが当初から目指された。ケープタウン郊外にあった長閑な農園の跡地に開設されたフォルケンバーグ・アサイラムは、当初は 65 床ほどの小規模な施設であったが、1894 年になると、シドニー・ミッチェル (Sydney Mitchell) というスコットランドの建築家が設計したイギリス風建物の建築が始まり、その一部は 1896 年から入所者の使用に供された (Louw and Swartz 2001: 8-9)。

しかし、フォルケンバーグ・アサイラムは、19 世紀末までに被収容者数が 3 倍に増加して慢性的な過密状態に陥る一方、1899 年に南アフリカ戦争が勃発したこともあって、優れた医師や看護師といった医療スタッフを確保することが困難になり、そのサービスの質は急速に低下していった (Marks 1999: 277)。そして、ケープ植民地が南アフリカ連邦として独立した 1910 年には、フォルケンバーグ・アサイラムは 400 名を超す入所者を抱えるまでになった。その後、南アフリカ連邦が第 1 次世界大戦に参戦すると、白人の労働力不足が再び深刻化し、そうしたなかフォルケンバーグ・アサイラムでは、1916 年に非白人用病棟が整備され、そこに収容した非白人精神病患者を施設維持のための労働力として活用するようになった (Louw and Swartz 2001: 8)。

このようにフォルケンバーグ・アサイラムは、1891 年にケープ植民地初の白人専用アサイラムとして開設され、1910 年までの植民地期を通じて白人精神病患者のみを受け入れていたが、その後、収容者数の増大と予算・スタッフの不足などもあって、1916 年には非白人精神病患者の受入れを開始した。今日、同アサイラムを前身とするフォルケンバーグ病院 (Valkenberg Hospital) は、南アフリカの西ケープ州における拠点的な精神科専門病院として機能している。

5. フォート・ボーフォート・アサイラム

白人専用のフォルケンバーグ・アサイラムがケープタウン郊外に開設されて 3 年後の 1894 年、今度はケープ植民地東部に黒人を中心とする非白人専用アサイラムが設けられた。それは、フォート・ボーフォート (Fort Beaufort) という旧要塞にある兵舎を改修する形で整備された施設であり、最初に収容されたのは 87 名の黒人男性精神病患者

であった (Swartz 2015: 38)。1897 年には黒人女性用の病棟が設けられている (Minde 1974: 2232)。

フォート・ボーフォート・アサイラム (Fort Beaufort Lunatic Asylum) の最初の院長は医師ではなかったが、1894 年からジョン・コンリー (John Conry) という県医務官が担当医を兼務するようになり、1898 年には同アサイラム初の専任の院長に就任した。そして、コンリーは 1908 年、アサイラムに隣接する土地に複数の小屋を建て、そこに黒人精神病患者を受け入れた。この「コンリーズ・アネックス」(Conry's Annexe) とのちに呼ばれることになるセクションは、アサイラムの運営予算が限られているなかで、建築費が安価な小屋を建設することでより多くの黒人精神病患者を収容しようとする試みであった。そうした試みがケープ植民地の他のアサイラムにまで拡大することはなかったが、非白人専用アサイラムであるボーフォート・アサイラムとそこにおけるコンリーズ・アネックスは、イギリス的なアサイラム建築物を整備しようとした白人向けフォルケンバーグ・アサイラムとは、まさに好対照な施設であったといえよう (Minde 1974; Sukeri et al. 2014; Swartz 2015)。

非白人向けのフォート・ボーフォート・アサイラムは、フォルケンバーグ・アサイラムなどと比して予算面で冷遇され、その施設環境は劣悪であり、被収容者の食事内容も貧弱であった。このため、フォート・ボーフォート・アサイラムでは、被収容者のなかで結核をはじめとする感染症がしばしば流行し、死者も少なからず出た。ケープ植民地独立後の 1910 年代には、同アサイラムはポート・アルフレッド・アサイラムとともに閉鎖を一時検討されたが、その後も精神病患者用施設として存続し、第 2 次世界大戦後の 1949 年にはその被収容者数は実に 2349 名にまで達したという (Minde 1974: 2232)。今日、フォート・ボーフォート・アサイラムは、タワー病院 (Tower Hospital) という精神科専門病院となっている。

6. アサイラム別被収容者数と人種隔離

表 1 は、ケープ植民地独立前夜の 1910 年 1 月 1 日時点における各アサイラムの被収容者数を示したものである。なお、同表にある 5 つの公立アサイラムのうち、前述のとおり、1910 年当時はフォート・ボーフォートが黒人を中心とする非白人専用アサイラムであるのに対して、グレアムズタウンとフォルケンバーグはまだ白人専用施設であった。

表 1 ケープ植民地のアサイラム別被収容者数 (1910 年 1 月 1 日時点)

アサイラム (開設年)	白人	非白人	合計
ロベン島 (1846)	56	399	455
グレアムズタウン (1875) ☆	403	—	403
ポート・アルフレッド (1889)	79	204	283
フォルケンバーグ (1891) ☆	428	—	428
フォート・ボーフォート (1894) ★	—	480	480
合 計	966	1,083	2,049

注) ★は非白人専用、☆は白人専用を示す。
出所) Minde (1975).

表 1 からは、そうした 5 つのアサイラムのなかで、1910 年時点で被収容者数が最も少ないのが、身寄りもなく行き場を失った精神病者を主に受け入れていたポート・アルフレッド・アサイラムであったのに対して、それ以外のアサイラムは 400-500 名程度の精神病者を収容していた、ということがまずわかる。

また、英領ケープ植民地における白人の比率は非白人に比して常に圧倒的に少なかったが、同表からは、アサイラム被収容者数全体における白人と非白人の比率はほぼ 1:1 であったこともわかる。このことは、比較的に裕福な白人世帯が精神病を抱える家族を主に私費患者としてアサイラムに入院させていたことを示唆している。

こうした英領ケープ植民地のアサイラムをめぐる大きな特徴のひとつは、人種的な隔離がまず施設内で試みられ、それがやがて施設間に発展していった、という点であろう。1846 年にケープ植民地初のアサイラムとして開設されたロベン島総合施療院や 1875 年に同植民地東部初のアサイラムとして設けられたグレアムズタウン・アサイラムは、どちらもが人種にかかわらず精神病者を受け入れ、施設内で性別などとともに人種別の病棟を設けた。これに対して、1891 年のフォルケンバーグ・アサイラムの開設を契機に、アサイラムを人種別に設ける動きがケープ植民地内において本格化する。そして、1894 年には非白人専用アサイラムとしてフォート・ボーフォートが開設され、1908 年にはグレアムズタウンが白人専用のアサイラムとなった。しかし、非白人向けのフォート・ボーフォート・アサイラムは南アフリカ連邦成立後も白人精神病者を受け入れなかったのに対して、白人向けのフォルケンバーグ・アサイラムでは、施設を維持するための安価な労働力として非白人の精神病者を受け入れ、清掃、庭仕事、運搬、洗

濯、水汲みといった作業を「作業療法」と称して強いるようになった。

ところで、1948 年の国民党政権成立を契機に始まった南アフリカのアパルトヘイト体制下では、「バンツーホームランド」(Bantu Homeland) と呼ばれる複数の「国家」が恣意的につくられ、そこに多くの黒人が押し込められた。これに対して、バンツーホームランド以外の地域では、カラードや黒人が「タウンシップ」(township) と呼ばれる専用居住区に住まわされて白人社会のための労働力として活用された。

そして、これまで本稿で論じてきたケープ植民地におけるアサイラムの史的展開、特にそこにみられる人種隔離のあり方は、実はそうした独立後の南アフリカにおけるアパルトヘイト体制とどこか相似的な関係にあるように見える。というのも、主に黒人向けのアサイラムであったフォート・ボーフォートは、「(のちのアパルトヘイト体制下でみられるようになった) バンツーホームランドのような存在」として位置づけられるのに対して、もともと白人専用アサイラムであったフォルケンバーグにおいて労働力確保のために施設内隔離の形で後年設けられた非白人病棟は、「(バンツーホームランド以外の南アフリカ白人社会でみられるようになった) タウンシップのような存在」といえるからである。

英領ケープ植民地は多人種社会であり、そのアサイラムは人種隔離をひとつの重要な機軸として展開された。そしてそこには、バンツーホームランドやタウンシップといった、独立後のアパルトヘイト体制下でみられるようになった人種隔離のあり方に通底する側面を見出すことができる。その意味で、英領ケープ植民地のアサイラムは、たしかにイギリス本国における精神医療の動向の影響を強く受けながらも、けっしてその単なるレプリカではなかったといえよう。むしろそれは、紛れもなくケープ植民地(南アフリカ)に社会的に根ざし、その動態を反映する形で展開されたのであった。

7. おわりに

これまで日本における精神医療史研究の分野では、海外といえば、ドイツ、フランス、イギリス、イタリア、アメリカといった欧米諸国が議論の俎上に載せられることが多かった。近代精神医療という人間の営みが歴史的にみてヨーロッパの地でまず成立し、のちにアメリカなどで大いに発展してきたことを想起すれば、そのこともある程度は首肯できる。これに対して、アフリカの精神医療史への関心は、少なくとも日本人研究者の間ではこれまで総じて低かったといえる。

しかし、本稿で垣間見てきたとおり、南アフリカをはじめとする一部のアフリカ諸国には、精神医療をめぐってそれぞれに豊穡な歴史がある。また、けっして精神医療史研究だけではなく多くの学問分野において、今日なお、ヨーロッパ中心史観的な見方からの脱却やその相対化が重要な課題のひとつとなっている。そうした意味で、「日本的な精神医療史（日本国内において研究・構築されてきた精神医療の歴史）」をいわば「グローバル・ヒストリー化」するためにも、日本の研究者には今後、その研究の射程を日本や欧米だけではなく、近隣のアジアはもちろんのこと、中東、ラテンアメリカ、オセアニア、そしてアフリカなどへと拡大していくことが望まれる。英領ケープ植民地におけるアサイラムの史的展開を論じてきた本稿は、そのひとつの、しかし、ささやかな試みにすぎない。

追記

本研究は、JSPS 科研費 20H04431 の助成を受けたものである。

参考文献

- Basu, Saumitra. 2016. "Madras Lunatic Asylum: A Remarkable History in British India." *Indian Journal of History of Science*, 51(39), 478–493.
- Burrows, Edmund H. 1958. *A History of Medicine in South Africa: Up to the End of the Nineteenth Century*. Cape Town and Amsterdam, A.A. Balkema.
- Deacon, Harriet. 1996a. "The Medical Institutions on Robben Island 1846–1931." In Deacon, Harriet. ed. *The Island: A History of Robben Island 1488–1990*. Cape Town, David Philip, 57–76.
- . 1996b. "Racial Segregation and Medical Discourse in Nineteenth-century Cape Town." *Journal of Southern African Studies*, 22(2), 287–308.
- . 2003. "Insanity, Institutions and Society: The Case of the Robben Island Lunatic Asylum, 1846–1910." In Porter, Roy and David Wright. eds. *The Confinement of the Insane: International Perspectives, 1800–1965*. Cambridge, Cambridge University Press, 20–53.

- du Plessis, Rory. 2015. "The Principles and Priorities of Dr T.D. Greenlees, Medical Superintendent of the Grahamstown Lunatic Asylum, 1890-1907." *Historia*, 60(1), 22–46.
- Louw, Johann and Sally Swartz. 2001. "An English Asylum in Africa: Space and Order in Valkenberg Asylum." *History of Psychology*, 4(1), 3–23.
- Marks, Shula. 1999. "'Every Facility that Modern Science and Enlightened Humanity Have Devised': Race and Progress in a Colonial Hospital, Valkenberg Mental Asylum, Cape Colony, 1894–1910." In Melling, J. and B. Forsythe. eds. *Insanity, Institutions and Society, 1800–1914: A Social History of Madness in Comparative Perspective*. London, Routledge, 268–291.
- Minde, M. 1974. "History of Mental Health Services in South Africa: part III. The Cape Province." *South African Medical Journal*, 48(53), 2230–2234.
- . 1975. "History of Mental Health Services in South Africa: part VII. Services since Union." *South African Medical Journal*, 49(11), 405–409.
- Nizamie, S. Haque and Nishant Goyal. 2010. "History of Psychiatry in India." *Indian Journal of Psychiatry*, 52(S.1), S7–S12.
- Smith, Leonard. 2014. *Insanity, Race and Colonialism: Managing Mental Disorder in the Post-emancipation British Caribbean 1838–1914*. Basingstoke and New York, Palgrave Macmillan.
- Sukeri, K, O.A. Betancourt and R. Emsley. 2014. "Lessons from the Past: Historical Perspectives of Mental Health in the Eastern Cape." *South African Journal of Psychiatry*, 20(2), 34–39.
- Swartz, Sally. 1999. "'Work of Mercy and Necessity': British Rule and Psychiatric Practice in the Cape Colony, 1891–1910," *International Journal of Mental Health*, 28(2), 72–90.
- . 2015. *Homeless Wanderers: Movement and Mental Illness in the Cape Colony in the Nineteenth Century*. Cape Town, UCT Press.